

# — 高校生が被爆体験を絵に描く —

## 基町高校の生徒と被爆体験証言者との共同制作による「原爆の絵」

広島平和記念資料館では、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、2007年度（平成19年度）から、被爆体験証言者と同校生徒が共同し、証言者の記憶に残る被爆時の光景を高校生が絵に描き、当時の状況を伝える「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。

この取組みは、被爆者が高齢化するなか、被爆の実相を絵画として後世に残すこと、そして絵の制作を通して、高校生が被爆者の思いを受け継ぎ、平和の尊さについて考えることを目的として行っています。

何度も打ち合わせを重ねながら制作される絵は、当時の惨状を克明に描き出すものであり、また、証言者の記憶や思いに高校生が寄り添い、双方の気持ちを共に伝えるものです。

被爆体験の継承の一つの形として、一人でも多くの方に絵をご覧いただければ幸いです。

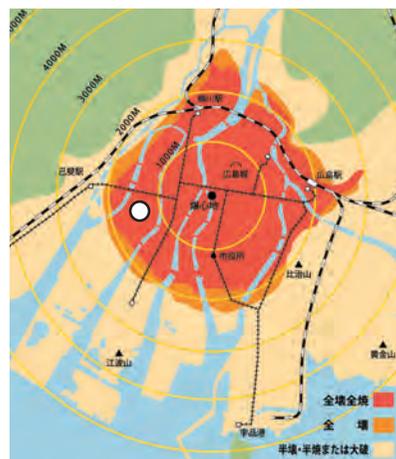
絵は広島平和記念館所蔵です。

## 「遺体収容所」になった二中のグラウンドに 並んでいた簀巻き状態の遺体

被爆体験証言者 浅野 温生

69回生 川崎 友貴

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

8月8日、広島県立第二中学校を訪ねた時、校舎は倒壊、全焼、跡形もなく、裏門には「遺体収容所」の張り紙があり、校舎は全焼、グラウンドには20体前後の死体が簀巻きで並んでいた。

近所の人々が、自宅まで逃げ帰って死亡したり、焼け跡、救護所などで見つけた身内の遺体を、火葬場もないので、取りあえずグラウンドまで運んできたらしい。(爆心地から1.6キロメートルの場所)

## 生徒のコメント

言葉で伝えられたものを想像し、自分の中で画像化するのが難しかったです。自分たちでこの絵の状態を再現して用意した資料も実際とは違ったりして、とてももどかしさを感じました。

普段何気なく住んでいるこのヒロシマで、72年前にこんなに悲惨なことが起こったんだということを改めて感じ、実際にそんな悲劇を経験しても生き抜いてきた戦争経験者の方々はとても強いと思いました。

## 被爆体験証言者のコメント

72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵のような体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ポコンポコンと煮えている音など説明しても、画像化するのは制作する諸君にとっても難しかったと思う。

## 暗闇の中の真赤な太陽

ヒロシマピース ボランティア 荒井 覺

73回生 岡田 友梨

平成31(2019)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

当時、大河国民学校の5年生だった荒井さんは、8月6日の朝、比治山橋東詰で祖母と建物疎開で家屋の廃材を拾い集めていた。その時、上空から聞き慣れたB29の爆音が聞こえ、強烈な閃光が走るとともに地響きを感じ、記憶が途切れた。原爆炸裂の爆風で飛ばされて気絶し、意識が回復した時に最初に目に入ったのが暗黒の中の真赤な丸い物体、それが太陽であった。子供心に地獄に来たと思い、すすやちりで真っ黒になった瓦礫の街の中で、大勢の人が逃げ惑う人の声と足音が聞こえたのでその方に恐る恐る這って行くと、そこにはさっきまで使っていた大八車があった。



## 生徒のコメント

最初に荒井さんと打ち合わせをした時は、私に原爆についての知識がほとんどなく、「大八車」や「ゲートル」といった言葉も、原爆の絵の制作をする上で初めて知りました。広島で育った一人として、少しは原爆について知っていると思っていましたが、実際には何も知ってはいなかったのだと感じさせられました。

晴れた明るい朝が一瞬にして暗闇に変わってしまったという事実が信じられず、自分の知らないことを絵にすることはとても難しかったです。瓦礫や逃げ惑う人々の様子なども、どう描けばいいのか戸惑いましたが、写真資料や荒井さんの証言を元に、私なりに解釈して描きました。

原爆の絵の制作を通して、本当に原爆は恐ろしいものだと感じています。今回の制作で学んだことを、戦争を経験していない方々に伝え、平和の尊さを多くの人に感じていただきたいです。

## 被爆体験証言者のコメント

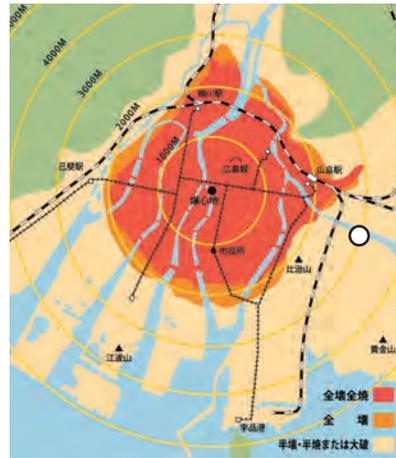
戦争も原爆も知らない自分の孫の様な学生さんに、どんな風に描いて頂くかの説明が大変でした。例えば真っ暗で暗闇の中に赤い太陽と云っても想像が付かないので深い濃霧で霧が黒い濃霧のようだと想像をしていただきました。火傷もその時には痛くも無く自分ながら気が付いていなかったし、傷を見ていなかったので、どんな様に描いて頂くか迷いました。

## 消えていった幼い姉妹…生きていてほしい

被爆体験証言者 新井 俊一郎

64回生 中須賀 愛美

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

黒々とそびえ立つ比治山の向こうから、被爆者たちが東大橋を渡って逃げてくる場面。手前の幼い少女2人はしっかりと手を握り合って逃げてきた。奥には被爆者たちを気遣う様子もなく、部外者を通すまいと立ちはだかる憲兵、さらに市へ入ろうとする記者らしき男性と乱闘する憲兵らがいる。

## 生徒のコメント

新井さんからは「2人の幼い少女が東大橋を渡って逃げてきている場面」を描くよう依頼されていましたが、より詳しくお話を伺っていくうちに、「憲兵らの話も入れたい」と思うようになり、このように複雑な構成になりました。新井さんが最も印象に残っているという2人の少女の顔はパンパンに膨れ上がっていたということで、それをどのように描くかということで一番悩みました。また、自分の想像に過ぎないとしても、こちらへ向かってくる「幽鬼のような」被爆者たちを描く度にやりきれなくなり辛かったです。新井さんは実際にこの恐ろしい光景を目の当たりにされました。しかしそれを辛さのあまり隠してしまうことなく、私たちに語ってくださいました。その決意に深く感謝します。また、改めて原爆がどれほど恐ろしく悲しいものであるかということを感じさせられました。

## 被爆体験証言者のコメント

彼方の広島は炎々と燃え上がり、壊滅していることは明らかでした。市内に続く狭い「東大橋」の上は、逃れ来る瀕死の被爆者の群で埋め尽くされ、仁王立ちの憲兵が「誰一人として広島には入れぬぞ」と立ちはだかっていました。写真機を肩にした新聞記者らしい人は、乗ってきた自転車もろとも橋下の川に放り込まれ、中学生の私たちも彼らに遮られました。と、その時、焼けたただれ、皮膚を引きずりながら逃れ来る群衆の足元から幼い姉妹が現れ、スローモーションのように私の横を通り過ぎて行ったのです。風船そのままに顔が腫れ上がり、互いの手を握り合ったまま「しっかりねっ」という姉の声を残して被爆者の中に消えたのです。なんとか助かっていて欲しい、と、願い続ける思いの込められた絵が、私に代わって祈り、訴えてくれることでしょう。

## 首筋のうじ虫を取っている母の姿

被爆体験証言者 李 鍾根

68回生 久保 友莉乃

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

家で、火傷を負ったところに赤チンという薬を塗って治療していたが、首の後ろが塗りづらい上に、薬が枕に吸われてしまうせいで治りが遅く、肉が腐ってうじがわいてしまった。そのうじを取り除くために、李さんのお母さんが「아이고(アイゴ)」と叫び、泣きながら箸でうじを取ろうとしている。

## 生徒のコメント

首にうじがわくという、聞くだけでゾットするような出来事が、当時ほぼ私たちと同じ年の李さんに起こったという事実に、最初はただただ驚いていました。状況をより近づけるために、資料を集めたりしましたが、初めは、その資料の画像を見るのにも抵抗がありました。本当にこの絵を描き切ることができるのかと不安に思うこともありました。

しかし、原爆の絵を描くという人生に二度とないような経験をさせてもらっている上に、李さんが辛い記憶を思い出して語ってくださったことを無駄にするようなことはしたくないと思うようになり、一層取り組む気持ちが強くなりました。この絵が李さんの活動に役立つものとなってくれば幸いです。

## 被爆体験証言者のコメント

最後に完成した絵を見せて頂き、本当に良く描けていると思いました。この絵のお蔭で証言をしやすくなり、特に子どもたちに伝えていく大切さも分かってくれると思います。

本当に、久保さん、倉重さん、富田さんの3人に、お礼を込めて感謝します。ありがとうございました。

## 非常トラック(男性優先)

被爆体験証言者 池田 精子

61回生 立川 侑子

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

原爆投下後の広島市内。海田町の病院へ向かう途中のトラックに負傷者が乗せられている様子を描いた。戦場へ兵士として送られる男性が優先的に病院に運ばれ治療を受けたため、老人や女性、子どもさえもトラックに乗せてもらえず、トラックの周りに人が群がり、大騒ぎになったという。

## 生徒のコメント

戦争のために全てを捧げ、そのために多くのものを失った時代。その苦痛に耐え生き延びた人の話を聞くということは、少しためらいがあり、また責任が重いものだった。しかし、語り継ぐことが戦争廃止と平和維持のために私たちができる手段の一つである。

兵士として戦場に行ったという話を祖父から聞いたことがある。戦場で生死の境に立った祖父は、今でも当時のことが頭から離れないと言う。私は絵を通じて見てくれる人みなさんに戦争の恐ろしさをしっかりと理解してもらいたいと思う。

制作中、負傷した人とその人を運んでいる兵士の肌の様子に苦労した。原爆によって肌の表面がはがれて全身真っ赤になった人もいれば、黒くくすんだ赤い血の塊のできた人などを描き分けするのが難しかった。

## 被爆体験証言者のコメント

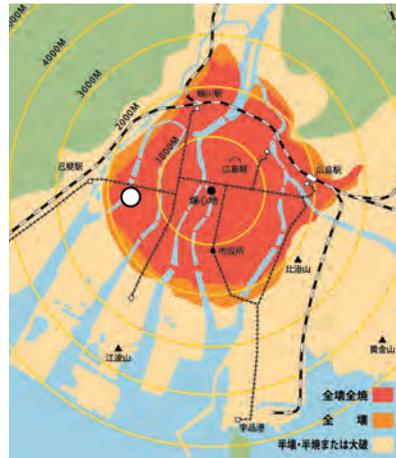
原爆を知らない立川さんが当時の話だけで描くのは大変難しいと思っていたが、出来上がった作品を見て、すばらしい出来だと思った。悲惨な情景が走馬灯のようによみがえり、二度と戦争があってはならない、人類の滅亡につながる核兵器を廃絶しなければいけないとの思いを強く感じた。立川さん、本当にすばらしい絵をありがとう。

## 私が見た被爆直後の被爆者(福島川河川敷)

被爆体験証言者 井口 健

67回生 伊東 良隆

平成25(2013)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

井口さんは福島川の隣にある奉公先の工場の集会所で被爆し、その衝撃で気絶しました。集会所に火が回ってきて目を覚ました井口さんは窓から飛び出し、河川敷に着地しました。

その時、足に釘が刺さり、その釘を抜いて上を向いた瞬間に井口さんが見た光景を絵にしました。

## 生徒のコメント

中学生の時、基町高校の原爆の絵の特集番組を見て、この取り組みを知って興味を持ち始め、この度この絵を描かせていただきました。

燃える街も全身に火傷を負った人も想像することができず、とても苦労しましたが、井口さんのお話を聞き、資料館の資料を見て、やっと描くことができました。

この絵を描くことを通して、被爆者の方の苦しみを知りました。被爆の実情について、多くの人に知っていただくための情報発信の中心になっていきたいです。

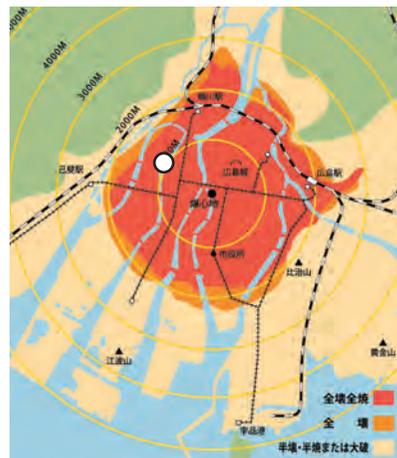


## 潮の引いた河原の惨状

被爆体験証言者 大田 金次

69回生 黒川 奈夏

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

原爆が投下された日の午後2時頃。潮の引いた天満川に焼け焦げた多くの人々や馬、家財道具などが流れてきて、その場で静止している場面。この様子は天満川だけでなく、広島市内の多くの川で見られたそうです。

## 生徒のコメント

今回初めて原爆の絵を制作するにあたって、証言者の方のイメージ通りに描くことができるか、不安でいっぱいでした。また、真っ黒に焼け焦げた人や溶けたビンなどを多く描くことはとても難しく、考えさせられることだなと思いました。

今までは、原爆を経験された方のお話を聞いただけでしたが、今回の活動で、聞いたことを絵で表現し、多くの人々に広島で起こったことを伝える手助けができ、本当に貴重な体験ができたと思います。

## 被爆体験証言者のコメント

この度は松田さん、黒川さんに大変お世話になりました。お会いする度に私は思った事を言い、大変苦労されたと思います。しかしキャンパスを見せてもらう度に私のお願いしたことが絵になっており、安心しています。私の講話の時には皆さんの絵を修学旅行の生徒の皆さんに披露したいと思っています。今後のご活躍を祈っています。

## 翌朝の悲しみ

被爆体験証言者 大林 芳典

60回生 丸住 裕香

平成19(2007)年度制作 水彩画(F15号)



## 描いた場面

原爆投下の翌日、破裂して水が噴き出す水道管に集まる人々。少年は腕の火傷を水で冷やし、大人達は家族を失った辛さから肩を落としている様子を描いた。

## 生徒のコメント

絵を描くにあたり、たくさんの資料を集めた。今までは情報を受け取るだけだったけれど、今回はその情報を自分なりに解釈しながら、絵を描いていくという作業をした。その作業が思ったよりも大変で、でも今までより深く原爆について考えることができた。私が原爆について考えながら描いた絵で、見る人にも何か伝えられたらいいと思う。

## 被爆体験証言者のコメント

8月7日、工場焼け跡あたりで出会った現場係長のつぶやきが肉親をいっせいに失った悲痛な嘆きの言葉と察し、いつも我々動員学徒を叱咤激励していた彼の傷心の深さを思い、暗い気持ちになった。

被爆証言ではあまり語ったことはないが、その時の情景は今も鮮明に脳裏に残っている。

## 8月6日の夜の火災～炎に追われる～

被爆体験証言者 岡田 恵美子

68回生 伊内 悠

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

原爆が投下された日の夜に起こった火災。  
家が燃え、逃げる途中に、瓦礫に足を取られた人や、  
遺体につまずいた人、たくさんの人が襲ってくる炎に  
呑まれたそうです。



## 生徒のコメント

証言者の岡田さんに被爆体験について何度もお話を聞いて質問をする度に、あの日、岡田さんが見た光景と私の想像している光景はおそらく全く違うのだろーうと思いました。真っ赤な夕焼けを見るとあの日の出来事を思い出して今でもつらいと、絵具をそのまま出したような赤だったとおっしゃっていたのが私の心に深く残りました。

岡田さんの記憶に少しでも近づけようとしてしましたが、どう描けば良いのか分からず途方に暮れることもありました。今でもまだ近づけることができていないかもしれませんが、少しでも岡田さんの証言の助けになってほしいです。

## 被爆体験証言者のコメント

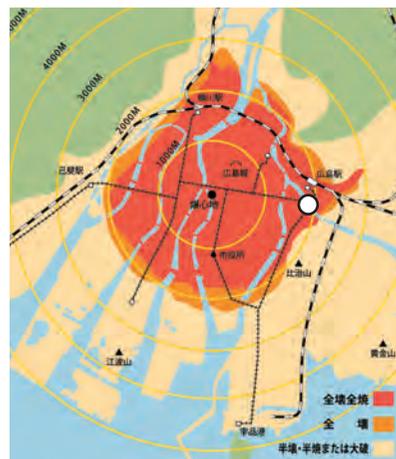
原爆体験のない生徒さんが立派に作品にして下さった。  
私は感動し、感謝しております。ありがとうございました。

## 炎の中で助けを求める女の子

被爆体験証言者 岡田 恵美子

68回生 岡島 愛

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



### 描いた場面

この絵は、岡田さんが避難している時に見た、炎の中で倒れている少女の絵です。この子は倒れてきた柱に足を挟まれていて、逃げようにも逃げられませんでした。岡田さんが見た時、般若のように目を見開いて、「助けて、お母さん」と叫んでいたそうです。

### 生徒のコメント

死の恐怖で般若のように歪んだ顔を描くことに一番苦労しました。また、炎に囲まれている様子を描くのも難しかったです。

岡田さんは「助けてあげたかったけれど、置いていくしかなかった。本当に辛かった」と何度も話されていて、その悲痛な体験を描くのはとても根気と集中力があることでした。この絵を見た人が思わずぎよっとするような表情を目指して描きました。

### 被爆体験証言者のコメント

原爆体験のない生徒さんが立派に作品にして下さった。私は感動し、感謝しております。ありがとうございました。

## 少年の思い

被爆体験証言者 奥田 榮

60回生 佐々木 成美

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

原爆に遭い、気付けば崩壊した家の前に立っていた奥田さん、周りには焼けただれた人がうずくまっていた様子を描いた。

## 生徒のコメント

広島に生まれ育った私は原爆の話を小学校の時から平和学習などで毎年聞いてきた。そのため、取り組みやすいのではないかと考えていたが、自分の知らなかった恐ろしい様々な出来事を知ったりどう描写したらいいかわからないこともあったりして、何度か筆の止まることもあった。絵の制作を通して、自分が現実の1割程度も原爆について知らないことを痛感し、もっとヒロシマについて学び、知るべきだと思った。

## 被爆体験証言者のコメント

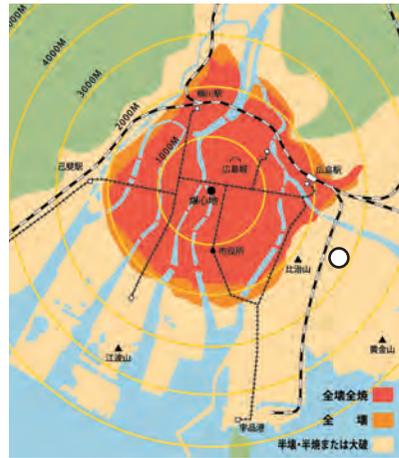
被爆当時の話を熱心にたびたび聞いてもらい、また質問してもらい感謝している。  
被爆時の様子が立派に描写されていて、とてもよい出来に仕上がっている。  
62年前の生き地獄を思い出し涙が出る。  
地球上では現在でも戦争が絶えない。1日も早く平和と核兵器の廃絶を願っている。  
佐々木さん、ありがとう。

## 空襲警報が鳴る中、 学校から泣きながら家へ帰る

被爆体験証言者 小倉 桂子

69回生 石原 晴香

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

証言者の小倉さんが戦時中、通っていた小学校にいたときに空襲警報が鳴った。先生の「走って帰れ」という声を聞いて、帰る途中で飛行機から撃たれると思い、恐怖で泣きながら走って家へ帰ったという場面。

## 生徒のコメント

原爆の絵の制作で苦労したのは、実際に見たことのない場面を描くための資料集めや、その場면을証言者さんの記憶を元に自分の手で描くことです。絵の中にある石灯籠はこの絵の中でとても重要なもので、それを描くために、今も実際に残っている本物の灯籠を見に行き、写真を撮り資料を集めました。

また、証言者の小倉さんは毎回丁寧にお話ししてくださり、若い世代に原爆の体験を知ってもらいたいという思いが強く伝わってきました。そのため、私も、少しでも証言通りに描けるよう努力をしました。

## 被爆体験証言者のコメント

被爆後の絵はたくさん見たけれど、被爆前に子どもがどんな経験をしたか、どんな恐怖を味わったのかを描いてほしかった。原爆が落とされたその日だけでなく、それ以前の戦時中の生活の様子がよく表現されている。

## 神社の石段に押し寄せる人々とそれを治療する兵士

被爆体験証言者 小倉 桂子

66回生 山口 達典

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

神社の石段に押し寄せる被爆者たち。それを治療する兵士。治療と言うものの、薬もなく、応急処置程度のことさえできない。油のようなものが入ったバケツを持って、火傷に塗ってやっていただけだ。手前の折り重なって倒れる人々はもう虫の息で、ハエがたかったり、ウジがわいていた。



## 制作者のコメント

人びとの傷口や肉、血管を描いていると、その痛みがこちらにも感じられて、絵を描くとはこういうことかと感じたことがありました。今まで、人の意識の中の光景を具体化するという経験がなかったので、とても辛く、苦しい日々でした。しかし、この経験が自分の次の制作に活けると確信していますし、この絵が小倉さんの証言の助けになれば幸いです。

## 被爆体験証言者のコメント

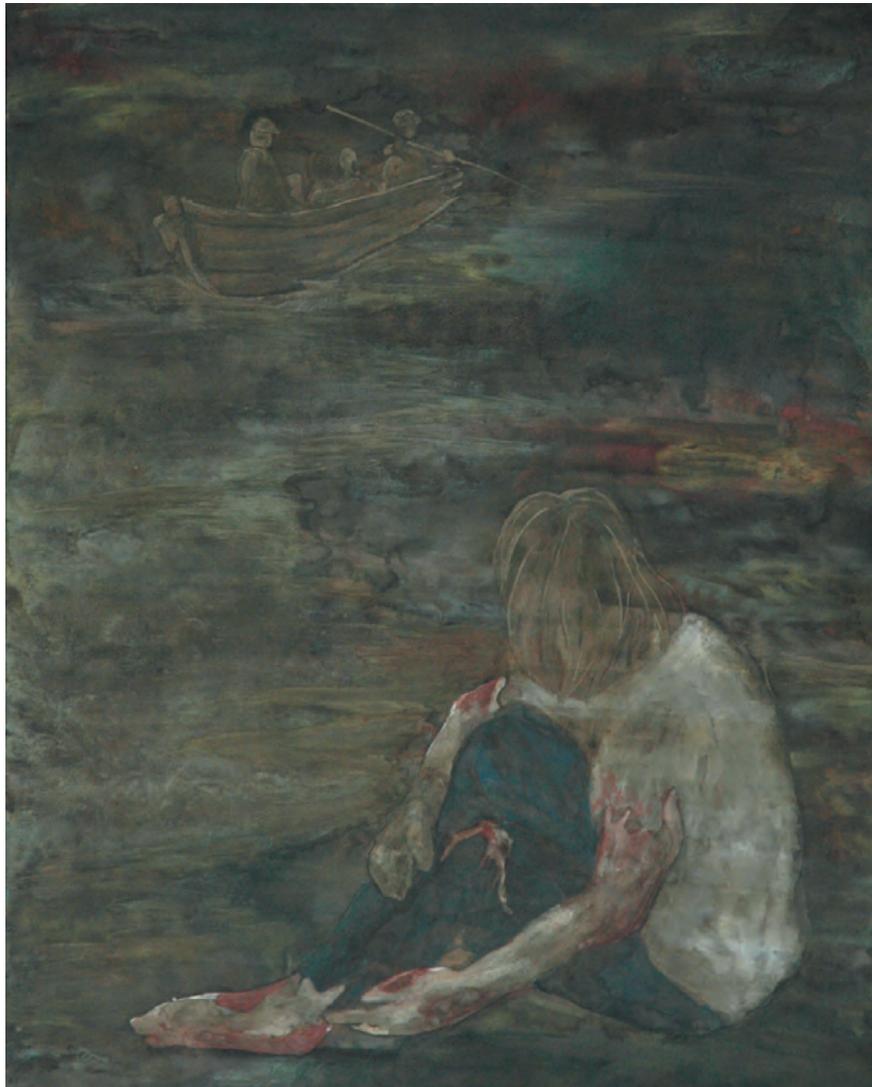
絵があまりにもリアルで恐怖を感じた。この風景が忘れられないで、その後何度も夢に見たことを思い出した。姉が見たという、頭がパッキリ割れて血管がくっきり見えている人もとてもよく描けている。

## 待つ

被爆体験証言者 笠岡 貞江

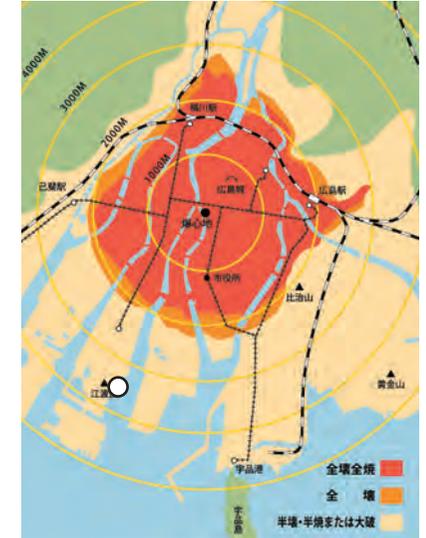
60回生 久保 玲奈

平成19(2007)年度制作 日本画(F15号)



## 描いた場面

原子爆弾投下後、子どもの無事を心配しつつ、潮が引くのを待つ母親。潮が引けば、川を渡り家へ帰ることができるのに、似島の方に行く舟にさせられてしまう場面を描いた。



## 生徒のコメント

被爆証言を基にたくさんの資料を見つけ、その中から想像を膨らませていくことが大変だった。濁りよどんだ水、血が流れる水を様々な色を入れつつ、どうにか表現できるように何度も色を塗り重ね、深みを出すことに苦労した。

人のために描くこと、過去を描くことはとても大変な活動だが、被爆証言を聞き証言に近づける努力と表現力の必要性、絵画として過去を残すことの重要性が少し理解できたと思う。

## 被爆体験証言者のコメント

雑魚場町で建物疎開作業中に被爆し、安全と思われる方向には逃げずに、子どもの身を案じて江波町の家に戻ろうとして、川の潮水が引くのを待っている母親の心情を察し、証言の際、胸が苦しく言葉に詰まってしまう。私の証言を聞き、その情景をイメージして絵を描いてくれた生徒さんに感謝する。

傷つき潮に流される被爆者、舟にさせられて運ばれる被爆者、母親も意思に反し舟に乗せられたものと思う。

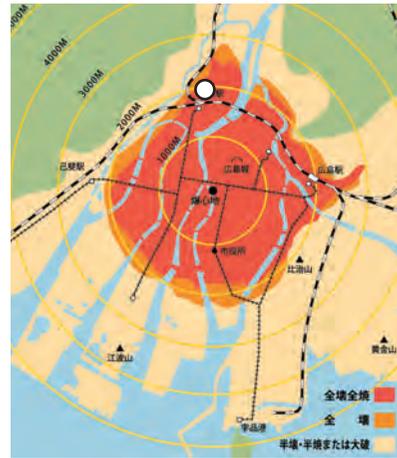
何枚もの下絵を描き、絵を仕上げるまでに色を重ね、手を加えて時間をかけて完成させた苦労に対してお礼を言いたい。

## 瓦礫の街

被爆体験証言者 梶本 淑子

61回生 長通 恵

平成20(2008)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

原爆投下直後、崩れた建物から友人とともに脱出した場面。

原爆投下直後の広島風景はがらんとしていた。

## 生徒のコメント

今まで原爆については漠然としか知らなかったもので、梶本さんの体験を聞いて、当時の状況を詳しく知ることが出来ました。それは、想像していたよりもっと悲惨で、ひどい状況でした。

その様子を絵にするのはとても難しかったです。描いている最中はただただ必死だったのですが、描きあげて改めて自分の絵を見ると、自分が住んでいる広島がこんなにも破壊されていて、多くの人が亡くなったのだということが現実のこととは思えず、衝撃的でした。

自分の描いた絵は、真実とはまだ程遠いかもしれないけれど、何かを感じていただければ幸いです。

## 被爆体験証言者のコメント

高校生として大切な勉強の合間に制作してくださって、大変だったと思います。本当にありがとうございました。全く想像もつかない時代の体験をよく理解してくださって感性の鋭い人だと感心しました。

私の思い通り、体験した通りの風景(街の色、空の色、ひとの呆然とした姿)がそのままに描かれています。そしてあの時(工場から這い出た時)の、音も風の動きも重たかった時間(とき)が絵を見て思い出されました。この通りでした。

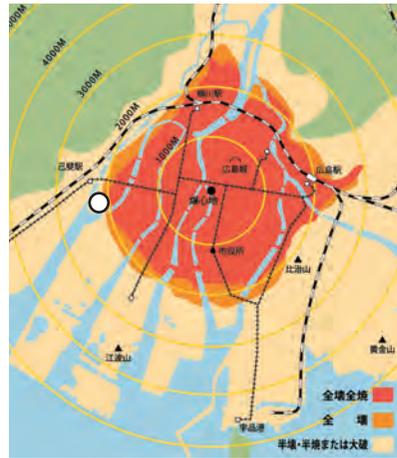
迫力のある立派な絵に感動しました。ありがとうございました。

## 避難する人と力尽きた人

被爆体験証言者 川崎 宏明

71回生 小野 美晴

平成30(2018)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

杖をついた祖父、私の手を引く祖母、1歳の弟を背負い4歳の妹の手を引く母の六人が大勢の人に混じって避難しました。場所は現在の太田川放水路の川底にあたる荒地です。道の両側や荒地には大勢の人が力尽き、座り込んだり、横たわったりしています。横たわっている人の中には既に息絶えた人もたくさんいた筈です。荒地の一角に横たわっている一人の女性とその横に途方にくれている小さな男の子と女の子の姿が気になりました。三人はどうなったのでしょうか？

## 生徒のコメント

苦勞したことは一人一人のストーリーを考えることです。考えるときに、まず自分の身近にいる人に例えました。もし祖母が…、母が…、姉が…、まだ小さいとこが広島で原爆にあったとすれば…。考えれば考えるほどどうしようもない深い悲しみで胸がいっぱいになっていきました。多くの人々の未来は、たった一つの爆弾によって狂わされていったという事を改めて感じ、この悲しみを忘れたくないと思いました。

## 被爆体験証言者のコメント

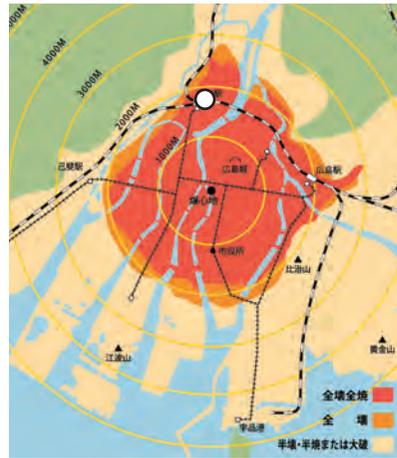
小野さんは当初、大勢の避難者を描くのに苦勞した様子でした。しかしある時から積極的な動きが出始めました。それはキャンバス上の一人一人の人物に「生活上の、あるいは被爆時のストーリーを作り」「その人なら今、どんな行動を取るだろうか、どんな気持ちだろうか」を考え、それを絵にする方法を採用した為です。画面手前の母と幼い二人の子ども、その隣で横たわっている一人の女性…絵に魂が吹き込まれています。特に母と幼い二人の子どものうち、男の子がキリッとした眼差しで一点を見つめているのは核兵器に対する小野さんの無言の抗議なのかも知れません。小野さん有難う。

## 原爆投下後避難する行列

被爆体験証言者 岸田 弘子

美術科教員 宮本 朋子

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

被爆後、倒壊した自宅から外に出たとき、通りには被爆者の流れがあった。「いつもの避難訓練とは違う、大変なことが起きたんだなあ」と思った。裂けた衣服や火傷した人、すべてが灰をかぶったように、皆、頭も顔も灰色、北へ北へと人の列は続いた。瓦礫の山を踏みながら、足はガラスが刺さっていても痛みを感じなかった。

## 制作者のコメント

制作当初は、家から出た時に被爆者たちの行列を目にした岸田さんの目線で描いていましたが、岸田さんから被爆当時の状況や避難した時の話を聞き、行列の中にお母さんと弟さんと一緒に避難する岸田さんの姿も描きました。

避難する人々を描くにあたって、被爆した状況が一人一人違い、怪我の具合や衣服のやぶれ、汚れなど、細部を設定して描くことがとても難しかったです。行列の中にいる人々にもそれまでの日々の生活があったことを想像して描き、絵を進めていく中で少しずつ具体化していきました。

この制作を通して、自身の想像を超える出来事を描くことの難しさを改めて感じました。

## 被爆体験証言者のコメント

原爆の悲惨さを伝える作品が見事に表現され、「ヒロシマの心」を継承し伝達する効果を大きくしてくれます。

あの日を境に、大切な人や、すべてのものを奪われ、自らも傷つき、人々はどうのように生き抜いてきたのでしょうか。この絵と対話し、「平和の心」が世界へ届きますように祈ります。

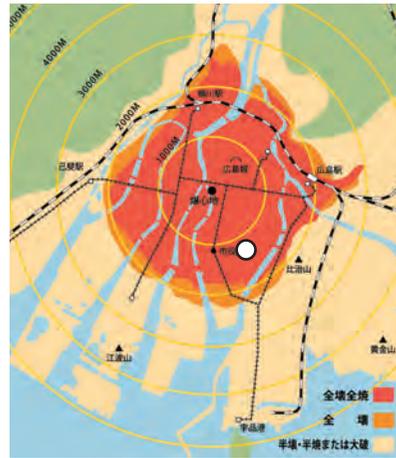
感謝の心でいっぱいです。有難うございました。

## 被爆

被爆体験証言者 北川 建次

60回生 加塩 紫莉

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

原爆投下直後の竹屋小学校を描いた。空は真っ黒で、周囲の状況がまったく見えない中、火事による光でのみあたりが照らされていた。

## 生徒のコメント

崩れた木造の校舎というものを実際に見たことがなかったので想像しにくい場面だった。画面もほとんどが暗く、校舎の瓦礫の質感を表現するのがとても難しかった。

## 被爆体験証言者のコメント

実体験がなく想像の世界だけでよくこれだけの絵が描けたと感心している。目茶目茶に壊れた校舎の様相がよく表れている。細かな点では想像の世界なので、あの時の実態と合わない点もあるが、豊かな感性で被爆直後の恐ろしい様相をよく示していると思った。このあと、紅蓮の炎が襲いかかってきて何もかも焼き尽して廃墟になるのであるが、その直前の様相がよく表現されている。多くの友や先生を失った悲しい惨状の場面で、62年経った現在も涙があふれ出してきて止まることを知らない。

## 叫び、苦痛、そして怒り

被爆体験証言者 國重 昌弘

63回生 野邑 遥香

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

原爆で火傷を負い、命からがらに帰宅した國重さんが母親に押さえつけられ、ケロイドになるのを防ぐために火傷した皮膚を父親にピンセットで剥いてもらうところ。

## 生徒のコメント

國重さんだけがその目で見、感じた苦痛を証言からイメージし、絵に描き起こすのにとても苦労しました。

この絵を描いて、私たちの世代が体験したことのない「戦争」というものがより具体化できたと思います。

## 被爆体験証言者のコメント

下絵が仕上がったのを見て、思わず顔をそむけた。私がお願いして絵にさせていただいたのに、私自身がその絵をじっと見るできない仕上がりになっていました。あの痛さが今でもよみがえってきます。

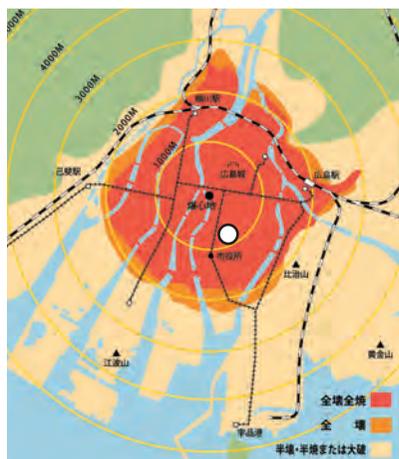


## 倒壊校舎からの脱出

被爆体験証言者 兒玉 光雄

64回生 花岡 美優

平成23(2011)年度制作 油彩画(F15号)



## 描いた場面

倒壊校舎から脱出して、材木に挟まってしまった友人を助け出そうとしている場面。

## 生徒のコメント

証言者の方の中にある、記憶の中のワンシーンをできるだけ絵で表現しようと試みたのですが、見たことのない情景を、言葉だけを頼りに絵にするというのは、とても難しかったです。

被爆体験証言者の方々の高齢化に伴い、体験者の方から直接当時の様子をお話して頂けるのは、もしかすると私たちの世代で最後かもしれません。原爆について、被爆三世の私たちでさえピンとこない存在となりつつあります。そうすると、私たちの次の世代の人たちはどうになってしまうのでしょうか。平和意識の高い広島で生まれ育ち、小さい頃から平和学習などをしてきた私たちには、原爆が投下された当時のことを次の世代の人たちへ語り継いでいき、平和意識の輪を広げていく義務があると思います。その為に、今回制作した絵が少しでも役に立てたら、と思います。

## 被爆体験証言者のコメント

爆心から800m余りの古い木造平屋校舎内で被爆。その瞬間に直撃弾が教室に命中したのかと思い、机の下に伏せました。私は奇跡的に倒壊校舎の下から垂木や板を折って脱出しました。外は真っ暗闇。太陽はおぼろ月の様です。校舎の下では級友が腕や脚を挟まれて救助を求めています。夢中になって数人を引っ張り出しました。

やがて黒い闇のとばりが消える頃、近くのビルの窓から炎が吹き出て、遠くに見える福屋や中国新聞社も炎に包まれました。校庭のユーカリの樹は幽霊のようです。

その時初めて広島市内が消えていることに気付きました。その頃の私は嘔吐を繰り返し、弱り果てていました。